

先生方へ

Introduction for the Instructor

はじめに

Japanese: The Written Language (以下JWL)は、英語を母語とするアメリカ人、あるいは英語に堪能でアメリカ文化に精通する成人（またはそれに近い認知能力を持つ）学習者で、日本語の話し言葉の基礎知識がある人のための教材です。話し言葉を知っていることが読みの習得に重要であることは、最近の言語習得に関する研究も示唆するところです。この教材の姉妹編である *Japanese: The Spoken Language* (以下JSL) を使用している場合、少なくともその第一課を修了していることがJWLを始める前提です。

目標

JWLの目標は、書き言葉を通して日本語でコミュニケーションをはかるための基礎を築くことにあります。そのためには読み書き能力が必要です。ここでの「読み」とは、意味（さらには意図）の理解を伴った過程と考えます。同様に、「書き」は文字の表記も含め、書き言葉による意図の表現と捉えます。JWLが目指す読み書きは、文字を媒介としたコミュニケーションです。つまり、単に漢字の形や音訓読みを紹介することではなく、これらの文字がコンテキストの中でどのように使われているかを、読み書きの経験を通して学習することといえます。文字学習と、社会活動としての目的を伴った読み書きの習得の、両方を目指しているのです。

英語を母語とする成人がスペイン語やフランス語のようなヨーロッパ言語を学習する場合、同起原の単語が多く、表記に使われる文字が英語と同様アルファベットであることは非常に有利なことです。ごく短時間の学習で綴りと発音の関係がかなり把握できるため、初級の段階でも、書かれた文章に触れることが新しい単語や構文を覚えることに繋がるからです。日本語ではどうでしょうか。現代の日本ではアルファベットの文字も頻繁に使用されています。しかし、英語を母語とする学習者が日本語を読むためには、平仮名、片仮名、漢字という3種類の全く新しい文字群を、表記に関する慣習的なきまりと共に覚えなければなりません。日本語の母語話者でさえ、これらの文字を使いこなすまでには多大な労力と時間を費やします。日本語で表記された文章を読むことによって、語彙や構文、さらにそれらに反映される文化的情報を理解吸収することを初級の日本語学習者に求めるのには無理があ

ります。外国語としての日本語における読み書きの学習は、もっと基本的なところから始めるべきでしょう。

日本語を外国語として学習する成人学習者と、すでに日本語を流暢にやつる日本人の子供とでは、同じ文字の学習といっても根本的な違いがあります。JWLでは二種類のかなと使用頻度の高い漢字550を、コンテキストの中で徐々に紹介していきます。その提示順序は、学習者が成人であること、つまり初歩の段階では日本語能力はまだ稚拙でも世界的知識は相当豊富で分析能力もあることを考慮して決められています。

文字を使ったコミュニケーションの媒体を総合してテキストと呼びます。テキストには段落構成のある文章もあれば、看板、メモ、落書き、広告など、いわゆる文章の形態を伴わないものも含まれます。JWLは自然なコンテキストの中で文字と書き言葉を紹介することにより、正確にテキストの意図を理解したり、状況に応じた文体で意図を表現する力を養うことを目指しています。

テキストをスラスラ読むためには、ひとつひとつの文字に意識を向けていられません。ところが、初級の日本語学習者は、文字の形や文字使用に関する諸々の約束ごとを、日本語という新言語と並行して学習しなければなりません。学習者が日本語を読むという行為は、必然的に文字の意識的な処理を伴いますし、覚えなければならない文字が多いために、文字一特に漢字一の学習が読み書きの学習だと勘違いする学習者もいます。しかし、音を聞き取れるだけでは聴解につながらないのと同様に、読むためには文字の処理以外にも様々な複雑な能力を必要とします。JWLでは、導入された文字が読解作業の中で素早く正確に処理できるような練習を取り入れました。

また、漢字が表意文字と考えられているため、日本人が日本語を読む時の脳のプロセスはアルファベット言語のそれとは根本的に異なると考えられがちでした。しかし最近の研究で、日本人が読む時に脳が処理する単位が、実は他の言語同様、文字ではなく単語であることが分かってきました。日本語の読み能力を養うには、テキストを文字列ではなく、意味と音を伴う単語レベルで処理できるようにしなければなりません。JWLの読み練習は、単独の文字ではなく少なくとも単語レベルで行い、それから文節、テキストと処理の範疇を広げられるようになっていきます。

構成

JWLは、姉妹書のJSLと同じく3つのパートからなり、各課はJSLの同じ課と対応しています。従って、JWLに使われているほとんどの構文や語彙は、JSLで既に紹介されたものです。しかし、JSLに紹介されていない構文や語彙がJWLで紹介されることもあります。そのような場合には、新出構文や語彙についての説明を記載しました。

JWLの各パートはさらに2巻または3巻に分かれ、それぞれにワークブックが付いています。オーディオプログラム、JWLに関する新情報や補助教

材を扱ったホームページ (www.yalebooks.com/JWL) も利用することができます。パート1第1巻 (カタカナ) と併用できるフラッシュカードもホームページからアクセスできます。

教科書の各巻では文字を紹介し、日本語の表記と様々な形式のテキストの形態について、例を挙げながら解説していきます。ワークブックには読み書きの練習問題があります。ページが切り取れるようになっているので、ページ毎に宿題として提出させることも可能です。教科書に出ている例文は全てオーディオプログラムに収録されていますので、読みの学習に音を取り入れることができます。ホームページでは、教師と学習者を対象にしたオンラインヘルプ、他の関連サイトへのリンクも紹介します。

JWL 全体の構成は次のようになります。

- パート1 全3巻 (第1課～第12課) 片仮名、平仮名、漢字 1～100
- パート2 全3巻 (第13課～第24課) 漢字101～400、辞書の使い方、書き言葉の特徴、文章構成
- パート3 全2巻 (第25課～第30課) 漢字401～550、テキストのジャンルと文体、読み書き能力の拡張

学習者は、パート1を習得した時点で、主にな中心の短いテキストが読めるようになります。例えば、簡単な手書きの伝言や電子メール、ファックス文書、リストなどです。またこれらと同じような形態で、様々な状況で使えるテキストを書くこともできるようになります。パート2はJSLパート2に対応する12課からなり、300の漢字をコンテキストに沿って導入します。また、国語辞典や漢和辞典の使い方、書き言葉に特有の表現や構成、読み書きのストラテジーなどを紹介します。パート3はJSLパート3に対応する6課を含みます。長文が多くなり、その中で新出漢字が導入されていきます。

JWLを用いた学習の進度はプログラムによって異なるでしょうが、大切なことは対応するJSLの課 (またはそれと同等の話し言葉の訓練) を終えてからJWLの課に進むということです。JSLのほうが数課先行していても問題はありませんが、JWLがJSLに先行しないように注意してください。いわゆる漢字圏からの学習者が対象の場合は、その日本語のレベルに応じて早いペースで読み書きの学習を進めることが可能です。しかし、このような学習者は漢字や熟語を母語の音と意味で処理する傾向があります。話し言葉を先行させることがここでも大切と言えます。

パート1第1巻：片仮名

本書では片仮名に焦点を当て、特に英語からの外来語の表記について詳しく解説しながら、通常使われる45の文字を紹介し、単語単位で読めるような練習を提供しています。各課はA、B、Cの3部分に分かれ、文字の紹介と読み

練習をセクションAとBで、表記の仕方、単語や句単位のテキストの書き練習をセクションCでするよう構成されています。学習者のレベルに関わらず、片仮名で書かれたものが速く正確に読めるようになることを目標としています。初心者で日本語の語彙が極端に限られていても、英語の知識があり、片仮名のしくみをしっかり把握していれば、片仮名で書かれたテキストが読めるようになります。現代日本語では片仮名の使用は増える一方ですが、かなり上級の学習者でも、片仮名に弱い人が大勢います。JWLにある体系的で明解な説明と例文は、そのような上級学習者にも役立つと思われます。

片仮名は主に外来語の表記に使われますが、その外来語の大多数は英語から来ていますから、片仮名しか読めなくても、レストランのメニュー、欧米への旅行日程やホテルの名前などは読むことができます。また、全て片仮名で書かれていないテキストでも、カタカナ語を拾い読みすることで内容の把握がかなりできるものもあります。また、学習者自身の名前を日本語（片仮名）で書くこともできますし、日本のメディアに登場する外国人の有名人の名前を拾い読みしたり、日本語で書かれた世界地図を使うこともできます。

外来語には、特定の人のごく限られた状況の中で使ったり流行語として一時的に使われるものもある一方、多くの人に使われ、日本語の表現として定着しているものも数えきれません。本書ではまず比較的变化の少ない人名と地名を通して日本語から英語への変換パターンを学習し、その上で食べ物、ファッション、スポーツ、オーディオ機器など、多様な分野で使われるカタカナ語を導入していきます。授業では、学生の興味や日本語のレベル、時事的な出来事も考慮し、様々なジャンルのカタカナ語を適宜紹介してください。

現代日本の文字メディアを使いこなすためには、片仮名を避けて通ることはできませんが、単に個々の文字の形状を知るだけでは不十分です。本書ではカタカナ語から元の英語を探るのに役立つ conversion tip (変換の助け) を提示しました。

英語と日本語の発音を比較すると、英語の方が使い分けられる音の数が多いため、英語では区別される音列が日本語では同じ音になってしまうことがあります。例えば英語の love、rob、rub という音も意味も全く異なる単語が、日本語ではどれもラブになってしまいます。さらに、英語の音節と日本語の拍の数え方にも大きな差があります。英語の“ice cream”には2音節しかありませんが、日本語のアイスクリームには7拍もあります。近年の外来語のほとんどは音がベースになっていますが、カタカナ語の発音と表記はあくまでも日本語の発音体系に支配されます。Conversion tip を学習し、多くの例に触れることにより、学習者は英語が日本語として使われる時に起こる発音の変化に慣れ、徐々にカタカナ語に親しんでいくことができます。カタカナ文字の導入の順序も、その文字の使われる単語の難易度や conversion tips が基になっています。各課の終わりには五十音表を提示して、そこまでに学習した文字を整理するようにしました。

パート1第1巻の使い方

第一課のセクションAには日本語の表記一般と、特に片仮名についての解説があります。英語の表記と日本語の表記の相違点が明確に示してあるので、学習者にこの説明をよく理解させることが大切です。

各課の学習の手順は次の通りです。

1. 新出文字の表す音を反復しながらその形をよく観察する。この段階では文字を見ることが主眼なので、「書く」練習にはあまり時間を費やさず、手書きのモデルをなぞる程度にする。
2. Conversion tip があればこれを読み、付随する例を読む。JWL ホームページにあるオーディオプログラムを使って例に挙げられた単語の発音を確認する。この時、長短母音、促音、撥音、無声音、音便、ピッチアクセントなどに特に注意を払う。例に挙げられた単語が素早く日本語の発音で、さらに内容を理解しながら読めるように、何度も順序を変えながら練習する。教師は付属のフラッシュカードの他に、実際の学習者の名前をカタカナで書いたものを用意する。例をいくつか読んだ後で conversion tip を読み返すとよい。その上でワークブックの練習をする。この順序でセクションBの終わりまで進む。
3. セクションCの始めにある例を読み、ワークブックの練習に進む。例を読む時にはオーディオプログラムを用いて発音を確認するようになる。
4. セクションCにある文字表記の指示に従って書き方の練習をする。個々の文字がうまく表記できるようになったらワークブックの練習に進む。ワークブックの書き練習は宿題として提出させるとよい。
5. 書き取りの練習をする。また、ホームページに新しい練習が掲載されていればそれもやってみる。

この手順のどの部分を実際に教室内で行うかは、それぞれのカリキュラムによって異なります。また、既習の文字、conversion tip も復習するようにします。カタカナ語の発音がより日本語らしくできれば、他の単語の発音の向上にもつながります。JWLを教室内で使用する際も、音を十分取り入れて読み書き学習の充実を図ってください。

また、読み練習や、書き取りも、文字レベルではなく単語レベルで処理するようにします。例えば書き取りで「アイスクリーム」ということばを書かせる場合、教師が「アイスクリーム」と言った後、学生にも「アイスクリーム」と言わせて単語として認めさせ、それを書かせるという手順を踏みます。

学習者による自習をどこまで求められるかによって、授業として教える

内容も異ってきますが、ごく基本的なことから授業内で行う場合でも、最終的にはテキストを媒体としたコミュニケーションのレベルに到達できるようにします。そのためには、読むこと、書くことが必要となるコンテキストを考えなければなりません。話し言葉によるコミュニケーションの一部として読み書きが必要となる場面を設定するようにするのも一つの方法です。例えばアイスクリームのフレーバーを読んだらそのなかから好きなものを選んで注文する、人名のリストを見ながらそのリストに出ている人に連絡の電話をする、新しくゼミに加わるアメリカ人学生の名前をメモしておくというような、現実的な社会活動の枠の中でテキストを読んだり、書いたりする練習をするようにします。こういった文化に根ざしたコミュニケーションとしての読み書き活動も、読み書きの学習を始める前に基本的な会話ができることにより可能となります。